

伊藤平左衛門と 竹中家



【近世から現代まで活躍する尾張の名工たち】

皆さんは、大工と棟梁の違いをご存知でしょうか？大工とは、古代律令時代の建築技術官の最高位をいい、一方の棟梁は、室町時代以降に特定の工事の長として使用され始めたと言われています。

尾張には古くから熱田神宮の造営を行ってきた工匠がいて、織田信長の安土城築城にも腕をふるったといいます。また絢爛豪華な日光東照宮の建設には、全国各地の名工たちが江戸に集結し、腕を競い合いました。

尾張の名工伊藤平左衛門と竹中家が登場したのもこの頃で、竹中家については、名古屋城の造営に関わったとみられる痕跡が残されています。両家ともに、現存する社寺建築から優れた技量の持ち主だったことは分かっていますが、その一方では未発見の遺構も多く、研究が進んでいるとは言えない状況にあります。

近年、工匠たちの業績が再評価され、2020年には国立近現代建築資料館で「工匠と近代化」という展覧会も開催されました。そこで紹介された控帳（スケッチブック）からは、工匠たちが好奇心旺盛で教養の高い文化人だったことが伺えます。

近代になると、伊藤平左衛門は京都で明治期最大の木造建築の東本願寺御影堂を手掛け、大工の頂点となり、また竹中家の竹中藤五郎は神戸に支社を興して、竹中工務店の礎を築きました。



東本願寺御影堂

教会

キリスト教の最古の教会は住宅の広間だったという。

そこへ信者が集まり、祈りを捧げる場が形成された。

その後、ローマ帝国に公認され使用された集会所「バシリカ」が、

現在の教会堂の起源となっている。



正面大窓のステンドグラス。図像は音楽の聖人セシリア

大聖堂のできるまで

昭和36年、名古屋に司教区が置かれると、それにあわせて大聖堂の建設の計画が持ち上がります。建設予定地は戦災復興計画で整備された南北に細長い敷地だったため、南に正面を向いた教会堂となりました。大聖堂建設に携わった初代司教の松岡孫四

古屋カテドラル聖ペトロ聖パウロ大聖堂といい、中部地区の司教座がある中心的な教会です。カテドラルとは司教の座る椅子カテドラから転じた名称で、日本では大聖堂と意識されています。

Catholic Nunoikekyōkai

登録／2015年8月
登録基準／造形の規範となっているもの
(名古屋カーラル聖ペトロ
聖パウロ大聖堂)

1961年(昭和36年)
尖塔部および内陣／鉄筋コンクリート造、
身廊部／鉄骨鉄筋コンクリート造
【設計】山下寿郎設計事務所
名古屋市東区葵1-12-3
<http://nunoike-nagoya-diocese.org>

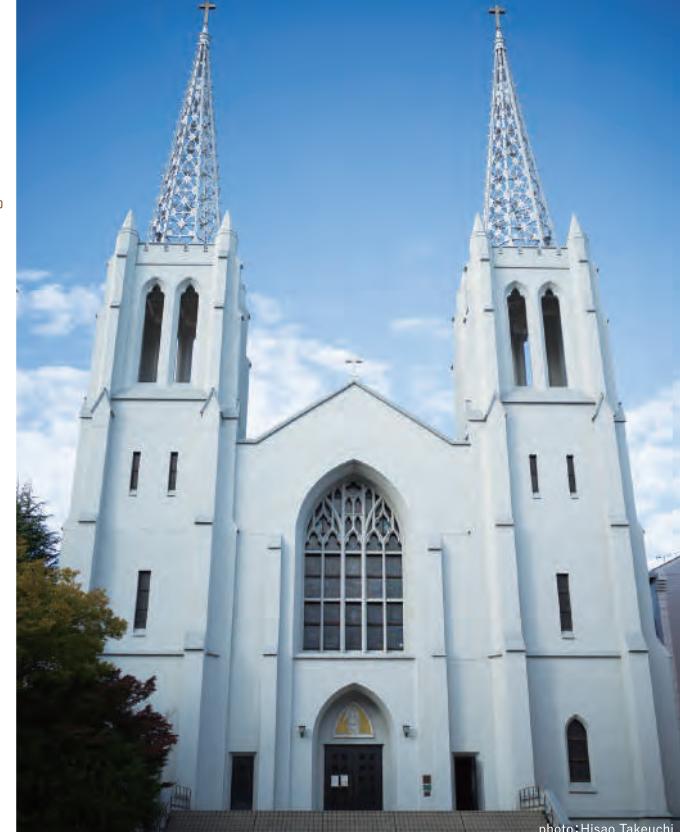


photo: Hisao Takeuchi

装飾の少ない抽象的なゴシック様式風の外観。塔の上部には左右で大きな違う鐘が釣られている

カトリック布池教会

パイプオルガンの響く、現代のゴシック建築風大聖堂

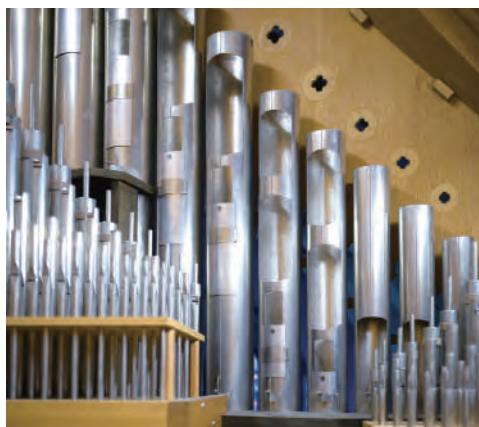
郎は、出身地長崎の伊王島で馬込教会堂を手掛けた人物で、布池教会の設計にも熱心だったと言います。その熱意に応えたのが、山下寿郎設計事務所の副社長今井猛雄でした。今井は異色の名建築家今井兼次の実弟で、後に日本設計を立ち上げました。

近代的なゴシック大聖堂

カトリック布池教会のデザインモチーフになっているのが、中世ヨーロッパのゴシック様式です。外観の2本の尖塔と、正面上部に大窓のあるかたちは、その様式を踏襲したもののです。尖塔の高さは約50mあり、また現在は白く塗られていますが、以前はコンクリート打ち放し仕上げでした。

大階段を上って堂内に足を踏み入れると、先の尖ったポイントドアーチが連続する大きな空間が広がります。一番奥が祭壇と司教座のある内陣で、壁面上部には青色のステンドグラスが嵌められています。ステンドグラスは、字の読めない信者のために形づくられた図像の役割があり、内陣にはイエスが、身廊側面には7つの秘跡が現されています。

また、入り口の上階には大きなパイプオルガンがあり、正面の大窓のステンドグラスを



全2422本のパイプで構成されるパイプオルガン

遮らないように左右に分かれています。パイプオルガンは小さな住宅ほどの大きさがあり、大小さまざまなパイプが風を通して荘厳な音を奏でています。

平日の午後、南西から差し込む光がステンドグラスを透過して、聖堂に色とりどりの光を落とす頃、パイプオルガンの練習が始まります。木製のベンチでは信者が祈りを捧げ、光の中で荘厳な音色が鳴り響きます。ヨーロッパで当たり前にある大聖堂の日常の姿がここにはあるのです。



聖堂内観。鮮やかな彩りのステンドグラスが美しい

街角の大聖堂

カトリック布池教会は、五感を揺さぶる感動的な瞬間に出会える大聖堂です。

かつて尾張徳川家の御下屋敷のあった布池には、カトリック名古屋教区の施設が集まる一角があり、そこに2本の尖塔を掲げたゴシック建築風の大聖堂があります。正式名称は名

登録／2010年4月
登録基準／造形の規範となっているもの（礼拝堂）



photo: Hiroshi Yoshida

瀬戸永泉教会

瀬戸川のほとりの、歴史ある教会堂

瀬戸に教会ができるまで
焼き物のまち瀬戸の中心を流れる瀬戸川のかたわらに、瓦屋根で黒い下見板張りの教会がひつそりとたっています。愛知県内で古い歴史を持つ、プロテスタント系の瀬戸永泉教会です。民家の建て込んだ場所にあり、車通りの多い川沿いの道路からでは見過ごしてしまくくらい街並みに溶け込んでいます。

プロテスタント系のキリスト教が名古屋とその周辺で布教を始めたのは明治10年ごろ。そこで布教を始めたのは明治10年ごろ。



外観を見る。ポインテッドアーチ風の窓に注目

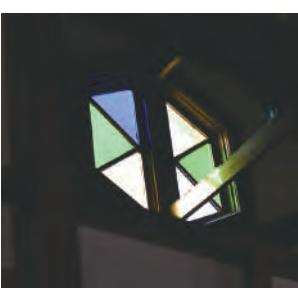


トラスのディテール。中心の束を上下2本の貫が繋ぐ

瀬戸への伝道は、同11年に水野村東光寺で開催された聖書配布と講義が始まりと言われています。

陶磁器の一大産地とはいえた瀬戸の職工たちの生活は苦しく、また気性も荒かつたため、彼らへの教義の伝達は難航したといいます。加えて、いまだキリスト教に対する排斥は根強く、他宗教との軋轢も絶えない状況が続いていました。

小屋組みのトラスをよく見ると、束の部分に貫が2本通り、トラス同士を連結している。一般的にトラスは明治24年の濃尾地震以降に普及したといわれ、それを和小屋の構造で補強した面白い工夫です。



郷愁を誘う色合いの小窓

外観を見ると、切妻屋根には瓦が載り、下見板張りの壁面には縦長の窓が規則正しく並んでいます。よく見ると窓のアーチが少し尖り、ゴシック様式で用いられるポインテッドアーチ風になっています。建設当初はアーチではなく、長方形の窓に外開きの鍵戸が付いていました。

礼拝堂に入ると、モダンで美しい空間に目を見張ります。壁面の白い漆喰とむき出しのトラスの小屋組みが程よい緊張感を保ち、両側に開けられた窓のおかげでとても明るいです。以前は正面の祭壇の後ろにポインテッドアーチ形のフレームがあり、窓のかたちとも響き合っていました。

小屋組みのトラスをよく見ると、束の部分に貫が2本通り、トラス同士を連結しています。一般的にトラスは明治24年の濃尾地震以降に普及したといわれ、それを和小屋の構造で補強した面白い工夫です。

モダンな礼拝堂

教会堂が建設されたのは明治33のこと。

建設費の半額は信者らの献金や葉の制作、旧講堂の売却などで捻出したといいます。永泉教会の簡素な姿は、そんな背景とも無関係ではありません。

外観を見ると、切妻屋根には瓦が載り、下見板張りの壁面には縦長の窓が規則正しく並んでいます。よく見ると窓のアーチが少し尖り、ゴシック様式で用いられるポインテッドアーチ風になっています。建設当初はアーチではなく、長方形の窓に外開きの鍵戸が付いていました。

礼拝堂に入ると、モダンで美しい空間に目を見張ります。壁面の白い漆喰とむき出しのトラスの小屋組みが程よい緊張感を保ち、両側に開けられた窓のおかげでとても明るいです。以前は正面の祭壇の後ろにポインテッドアーチ形のフレームがあり、窓のかたちとも響き合っていました。

僅かな飾りのもたらすもの

この教会にはもうひとつ、建物を特徴づけるデザインがあります。それは正面の玄関ポーチの上にある六角形の小窓です。小窓には色ガラスが嵌まり、午後になると堂内を緑や青の光がゆっくり流れていきます。後の改築で空けられた窓ですが、とても見事なデザインです。

毎年11月の永眠者記念日になると、永泉教会に関わりのあった故人の写真が持ち寄られ、亡くなった人を偲びます。壁にかけられた写真を小窓から射す光がなぞるとき、言葉にできない感動を覚えます。それは、まことに根を下ろした教会の営みを思い起こさせるからなのかもしれません。

1900年 明治33年
木造平屋建て
〔設計〕不明
瀬戸市杉塚町5



光の十字架が浮かび上がる礼拝堂。鉄トラスにも注目

で、礼拝は徳川園前の中京法律学校の教室を借りて行つたと言います。

浮かび上がる十字架

念願の教会堂が再建されたのは昭和28年。まちは戦後復興で賑わいを取り戻しつつあり、新しい敷地への移転が難航したため、旧教

会堂の跡地に建てられることになりました。設計を担当したのは、明治末期に近江八幡に事務所を構え、関西を中心に800棟以上の建物を手掛けた、ヴォーリズ建築事務所です。教会堂の外観を見ると、礼拝堂は道路に面した西側を壁にして、ラテン十字形の窓を嵌めています。午後になると、この窓からは明るい光が差し込みます。日本の建物は西日を避ける傾向にありますが、上手にあつかうことで、ドラマティックな光を得ることができます。

堂内へは敷地の奥にある塔屋の玄関から入ります。トンガリ屋根の塔に上るような気のする、楽しい入り口です。

礼拝堂に入つてまず目を奪われるのが、浮かび上がる光の十字架です。よく見ると十字架の枠だけ琥珀色のガラスがはめられ、フレームで強調された光はいつそう輝いて見えます。

また、深い天井に架かる特徴的な鉄トラスも十字架への視線を妨げず、背の高い腰壁も木製のベンチと合わせて空間の重心を落として、浮かび上がる十字架を引き立てています。

これら空間の演出は、ヴォーリズが設計の際に重視した光への強い思いに基づいています。



塔屋の上の十字架を支える芯柱

1953年(昭和28年)
木造平屋建て・塔屋2階建て
「設計」ヴォーリズ建築事務所
名古屋市東区徳川町2-30-3
<http://jelc-fukkatsu.sakura.ne.jp>



赤い屋根と緑のトンガリ屋根が目を引く外観。壁面のラテン十字形の窓がポイント



塔屋を見上げる。2階には小さな部屋がある

日本福音ルーテル復活教会

穏やかな街並みにある、十字架の浮かぶ教会堂

かわいい教会

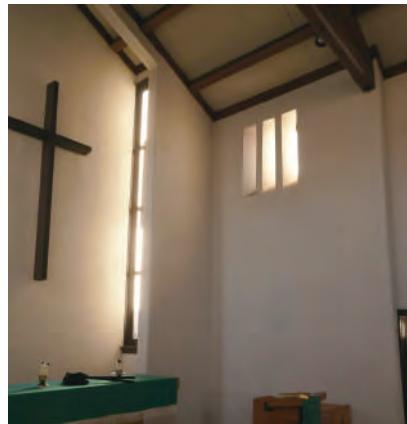
徳川美術館の黒門を通り過ぎ、登録文化財の徳川園境内に沿つて緩やかに下る道を進んでいくと、緑色のトンガリ帽子の塔の付いた赤い屋根のルーテル復活教会があります。道路に面したラテン十字形のガラス窓と、鮮やかな色の屋根が目を引いて、近所の人たちからは「かわいい教会」と親しまれています。プロテスタント系の日本福音ルーテル教会が大曾根を拠点に伝道を始めたのは昭和3年のこと。その後、現在の教会堂のたつ場所に最初の大曾根教会が出来上がりました。ところが太平洋戦争のさなか、名古屋大空襲で教会堂は罹災し、閉鎖に追い込まれます。大曾根教会が再開されたのは終戦から5年後

構成に対して、健康や衛生面から疑問を呈していました。

おだやかな日常の風景

午後になると、教会の前を小学校の子どもたちが元気に下校していきます。赤い屋根と緑のトンガリ帽子の教会堂を背景に、子どもたちの黄色い帽子が映え、まちが急に明るくなつたような気がします。

ルーテル復活教会は、おだやかな日常の風景に明るい彩りを添えている、とても素敵な教会堂です。



内陣の聖壇のスリットと壁上部の小窓

ルーテル岡崎教会を設計したヴォーリズ建築事務所は、そんな光のあつかいに長けた、日本の近代建築でも指折りの事務所です。

ヴォーリズ建築の美

日本福音ルーテル教会が岡崎の伝道を始めたのは昭和27年のことで、教会堂の建設も同時に進められました。設計を担当したヴォーリズ建築事務所のW・M・ヴォーリズは、伝道を目的に来日したアメリカ人で、メンソレータムなど輸入品を販売する近江兄弟社を興し、社会活動を通して布教に務めました。建築事務所もその一環で

立ち上げられたものです。また宣教師たちとの交流から、教会堂やミッション系の学校を多く手掛けました。

ルーテル岡崎教会は、白いスタッコ仕上げの壁に赤い桟瓦が載る、アメリカのコロニアルスタイルの教会堂を思わせます。また、外観で目を引くのが、屋根の上に載る背の高い塔です。先端には十字架が掲げられ、設計段階では鐘楼などの案も検討されていました。

かつては引き戸だった入り口扉を開けると、白い礼拝堂がすぐ目の前に広がります。天井の高い身廊には木製のベンチが並び、その両脇には、パーテーションで区分けできる側廊があります。堂内の窓には木製のサッシが残り、柔らかい表情を与えています。

正面奥の内陣に近づくと、引き込んだ聖壇の両脇にスリット状の細い窓があることに気が付きます。また壁面上部にも斜めに穿たれた3つの小窓があり、採光に心を配っていることが分かります。

夕暮れ時、内陣右側から入る夕日が聖壇上部のスリットや高窓から差し込んで、礼拝堂を緋色に染め上げます。白い壁面で拡散された光がエーテルのように全体に染み渡る光景に、思わず陶然となります。



photo:Hitoshi Kumamoto/Sayaka Ito

身廊から聖壇のある内陣を見る。夕日に染まる堂内が美しい

日本福音ルーテル岡崎教会

寺町に紛れ込んだ、夕焼けの教会堂

夕日に満たされる教会

ルーテル岡崎教会は、黄昏時の礼拝堂が夕日で満たされる、美しい教会堂です。

キリスト教の教会堂は、光のあつかい方に特徴があります。ゴシック建築のステンドグラスしかしり、ルネサンス建築のドーム頂部のクーボラしかしり。また近代建築の教会堂にも、光を美しくあつかった名作が数多くあります。



アメリカのコロニアルスタイルを思わせる外観



ピッタリ収まる小さい洗面台

1953年(昭和28年)
木造平屋建て(一部2階)
[設計]ヴォーリズ建築事務所
岡崎市伝馬通4-54



大明寺聖パウロ教会堂の内観。軽やかなコウモリ天井

で、構造はレンガ造と木造の混構造となっています。
圧巻なのは内部空間。暗い礼拝堂内には
ステンドグラスの鮮やかな光が縦横に浮か
び上がり、バラ窓や天井の交差リヴ・ヴォー
ルトなど典型的な西洋のゴシック建築の要素
が散りばめられています。



大明寺聖パウロ教会堂の外観。鐘楼は後の増築

教会堂では結婚式を挙げることもでき、社
会見学で来館した子どもたちにも大人気の建
物で、堂内にはいつも歓声が響いています。

大明寺聖パウロ教会堂

この教会堂は、明治12年に長崎の伊王島に
建てられました。一見すると和風の建物に見
えますが、足を踏み入れると軽やかな交差
リヴ・ヴォールト天井に驚きます。長崎では、
コウモリ傘の骨に似ていることからコウモリ
天井と呼んでいたそうです。また、内陣の右



明治村といえば
牛鍋が有名ですが、
聖ザビエル天主堂近くの
レストラン「浪漫亭」の
オムライスアイスも
とってもオススメですよ♪

側にはフランスの巡礼地のルルドの洞窟が再
現されています。小ぶりな建物ですが、味わ
いのある教会堂です。



聖ザビエル天主堂の外観の眺め。当初はかなり無茶な構造でつくられていたという

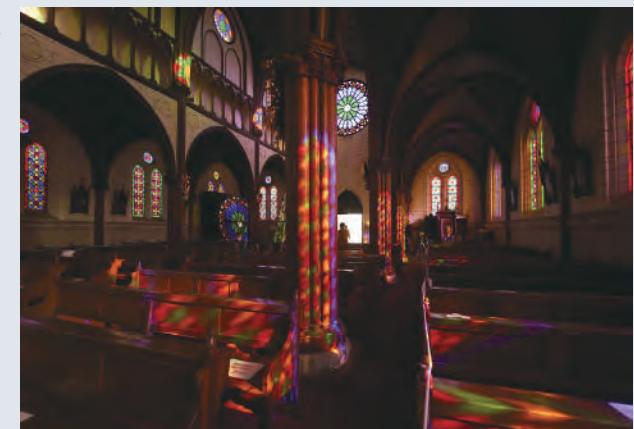
photo:Hirosi Kumamoto

特集 3

博物館明治村の教会堂

聖ザビエル天主堂

近代建築の宝庫、博物館明治村にも美しい
教会堂があります。その3件はいずれも登録
文化財や重要文化財となっています。
聖ザビエル天主堂は、明治23年に京都市中
京区でフランシスコ・ザビエルを記念して献堂
されました。白い外観は漆喰が塗られたもの



聖ザビエル天主堂内観。ステンドグラスの光がとても美しい



column

神言神学院の 聖堂

しん げん しん がく いん

【アントニン・レーモンドが手掛けた、コンクリートの教会堂】

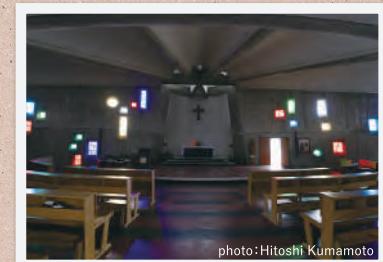
名古屋には、まだ文化財にはなっていない、とても素晴らしい教会堂があります。それが神言神学院の聖堂です。設計は、日本の近代建築に偉大な足跡を残した、チェコ出身の建築家アントニン・レーモンドです。

神言神学院は、キリスト教カトリック派の聖職者を育てる学校で、場所は名古屋市昭和区にある南山大学に隣接しています。ちなみに南山大学校舎もレーモンドの作品です。（「あいちのたてもの まなびや編」参照）

丘陵の上にある神言神学院は、少し離れた場所からでも聖堂の尖塔が見え、コンクリート打ち放し仕上げの独特な造形が目を引きます。聖堂は口の字形に配置された修室や食堂、集会室に囲われています。このような配置は、キリスト教の修道院に古くからみられる形式です。

聖堂内部は、コンクリートの重厚な空間に色とりどりの光が浮かび、とても幻想的です。扇状の平面は尖塔が立ち上がる内陣に収斂され、上部は大きな吹き抜けになっていて、ところどころ明り採りの窓が切られています。コンクリートのダイナミックな造形に僅かな光が引き込まれ、厳肅な雰囲気をたたえています。また地下聖堂の天井も力強い造形が見どころです。

神言神学院の聖堂は、コンクリートの造形美を追求したレーモンドの真髄が味わえる、モダニズム建築の傑作です。



聖ヨハネ教会の内観。袖部のステンドグラスから光がたっぷり入り、堂内はとても明るい



屋根とレンガのコントラスト、賑やかな装飾が楽しい外観

最後に、重要文化財の聖ヨハネ教会を紹介しましょう。この教会は明治40年に京都市下京区に建てられました。正面の左右には尖塔が立ち、柱型やアーチ窓などレンガの表情が豊かなロマネスク様式風の外観が特徴です。2階の礼拝堂も必見です。塔内の階段を登れば、両袖の大きなステンドグラスがたっぷりと光を取り込み、二つの塗られた竹のすだれの天井が光を反射して、堂内は驚くほど明るく感じます。

これら明治村に集められた建物は、ほとんどが所有者から寄贈されました。移築に際しては短い期間での調査と解体作業に追われ、再建時も大変な苦労がありました。そのノウハウが、現在の近代建築の保存や修復へと生かされています。

聖ヨハネ教会堂

設計者のガーディナーは、立教学校（後の立教大学）の校長を務め

会堂を紹介しましょう。この教会の後建築家としても活躍しました。

それぞれの教会堂は入鹿池を望む眺めの良い場所にあり、幸せな余生を過ごしています。